

## 2021年度学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

**本校の教育理念** 創立者福澤諭吉が唱えた「独立自尊」を教育理念とし、未来の先導者の育成を目指している。本校は中高一貫6年制の男女共学校として1992年に開校し、横浜初等部を含めた小中高一貫校として3年目を迎える。情操豊かで、創造力に富み、思いやりが深く、広い視野に立って物事を判断し、社会に貢献できる人、社会的責任を自覚し、知性・感性・体力にバランスのとれた教養人の育成を教育目標としている。

**本校の特色** 基礎を確実に身につける、きめ細かな指導を基本とし、開校以来、語学と情報リテラシー教育に力を注ぎ、「異文化交流」と「情報教育」を教育における大きな柱としている。本校では、帰国生が中等部では約20%、高等部では約25%という高い割合を占めており、異文化の交流が自然な形で学校の中で生まれている。二人担任制を導入し、きめ細かい生徒対応を目指している。

### 【2021年度総括】

#### ●教科教育活動について

開校以来、各教科とも一貫校の特性を生かし、中等部は基礎的知識の習得、高等部では習得した知識を基に論理的思考や表現力を養う活動を行い、中高で継続的、発展的な教育内容になるよう配慮している。2021年度は2つの点が特筆される。まず1点目は、横浜初等部からの卒業生が中等部3年生に進学し、小中高一貫校の体制が整った。これにより、本校は中等部1年から高等部6年まで全て6クラス編成となった。もう1点は、新型コロナウイルス感染症に関してであるが、命を守ることが最優先の中、学校の責務として学びを継続するための「闘い」であった昨年から、今年度は、コロナと「共存」しながら学びの質の向上させる、さらには将来に向けてのハイブリット教育の可能性を見据えて「研究」の年であった。社会の先導者の育成を教育理念とする本校では、最近のようにSDGsが謳われる以前から、これらの目標をカリキュラムに明示、あるいはヒドゥンカリキュラムとして扱ってきた。本年度は、各教科で、年頭よりSDGsを意識的・積極的に授業に組み込んだ。社会科地理分野では、ゴール13（地球環境）、14（海の環境）、15（陸の環境）を扱い、公民分野ではゴール5（ジェンダー平等）、10（人や国の不平等）について学んだ。理科では、例えば脱炭素エネルギーの学習を、ゴール7（エネルギー）、9（産業と技術革新）と関連付けた。もとより学習目標がそのままSDGsに重なる家庭科では、例として、「つくる責任・つかう責任」、「働き方格差」、「グローバル経済」、「住み続けられるまちづくり」など、カリキュラム全体で、SDGsの17のゴールのすべてを1年生から6年生のカリキュラムで網羅している。間接的なSDGsの学習として、情報科では、タイピング入力練習のテキストをSDGsゴールにしたり、英語科では、speech, reading, writingのトピックに意識的にSDGs関連を選んだりした。意外なところでは、国語科で扱った素材、授業内の活動や課題が、より深いところでSDGsの達成に向かう学習になっているということが確認できた。今年度は、SDGsという切り口で総括してみたが、本校の教科教育活動は、学年、教科区分ではなく、総合的に融合的に展開されていることが再認識された。

新型コロナウイルス感染症対策に関しては、今年度は1月後半のオンライン学習期間を除いて、ほぼ対面授業を行うことができた。教員も、オンライン学習の利点を活用しつつ、いつオンライン学習体制に入ってもいいように準備することができた。授業内容に一番影響が出たのは音楽科の歌唱活動であろう。学年活動としても意義の大きい中等部合唱コンクールを開催できないことは、本校の文化・情操教育への貢献を考えると非常に残念であったが、打楽器を中心とする「音楽発表会」という形で音楽を発表する経験を提供することができた。理科の実験や体育科の球技には、使用できる器具制限の影響が少なからずあった。英語科では、授業内音読、ペアワーク、クラススピーチなどの発話活動に制限が出た。

#### ●委員会活動について

各委員会は、本校の教育目標が達成されるよう設置され、全ての教員が参画している。毎年各々が管轄する教育場面において生徒の安全や、教育効果を検証し評価している。総じて、コロナ禍、2年目ということで委員会の活動は感染症対策を行いつつ、可能な限り「通常」への移行を模索し続けた1年であったといえる。今年度は、宿泊を伴う旅行・国際交流を除いて、完全にストップした活動はなかった。毎年のことだが、生徒係にとっての懸案は湘南台からのバス通学であった。バス停での乗車方法を見直し、一般客と分離しつつ、生徒の素早い乗車を図った。旅行、合唱コンクールなどの行事は中止を余儀なくされたが、文化祭だけは早くからオンライン開催を決定し、昨年度の経験をもつ少数の文化祭実行委員の生徒のもと、各クラス企画をつくりあげていった。ITスキルが高い一般生徒も多いので、文実側とのコミュニケーションも円滑に行われていた。コンピュータ委員はよりオンラインへの対応を進めた。いつオンラインに切り替わっても大丈夫なよう、万全の準備ができた。生徒会はオンライン意見箱を設置することで、生徒側の要望を素早く学校に届ける仕組みをつくりあげた。コロナ禍がもたした成果であるといえる。論文実習は20段階評価になった1年目として、試行錯誤を繰り返した。論文実習2の授業を設定することで、担当教員と話し合う時間をつくったことは、教員・生徒の双方にとってプラスだったと思う。また、全員にプレゼンテーションの機会があり、本校生徒の「話す力」の高さを示すことができた。昨年度は中止になったBLSが復活した。本校生徒が人命救助を行う事例もあり、続けることに意義がある活動といえる。クラブ活動は体連・文連ともに大きな制約があったが、昨年度に比べれば緩和された。生徒側も学校側が提示する厳しい感染症対策のルールを守ったこともあり、クラブ発のクラスターはかなり抑えられた。ただし、コロナ禍以前からの懸案である施設不足についてはまだまだ改善の余地がある。国際交流は今年度も中止を余儀なくされた。その一方、芸術鑑賞会は中等部(ミュージカル)・高等部(オペラ)ともに完全な形での実施ができた。広報活動に関しては、学校説明会などでの対面形式も組み合わせつつ、多くはオンラインでの開催になった。コロナ禍が続き、多くの行事が本来の形ではなくなり、生徒が常にマスク姿になっているなど、本校の良さをアピールすることの困難さを実感したといえる。施設関係においては、第3体育館の雨漏り対策、第1グラウンドのベンチの新設などが進んだ。しかし、約30年が経過し建物の老朽化などハード面での問題は今後も課題として残る。泊まりの旅行はなくなったが、日帰り旅行を中心に総合学習としての役割を果たすべく、努力した。来年度以降、本校が長年続けてきた旅行を少しでも本来の形に戻すことを期待したい。

#### ●保護者からの評価について（学校関係者評価より）

2018年度より自己評価の客観性と透明性を高めることを目的とし、学校関係者評価を実施している。実施の方法としては本校生徒の保護者代表（世話人）の29名に、本校が実施している自己評価の方法や設置項目などに対する評価を行って頂いた。手順としては、事前に本校ホームページの学校評価一覧をご覧頂き、アンケートの設問に4段階評価で回答して頂いた。29名より回答を頂き、29名分を有効な回答として集計を行った。どの設問に対してもD（不十分）は無く、全回答数（回答者29×設問数7）203のうち、A（十分）が60.6%、B（おおむね十分）が34.5%と多くの設問で十分、おおむね十分と回答頂いている。

アンケートは、評価内容に対してではなく、評価の仕組みに対するものであり、保護者を代表とする29名の評価であったが、貴重なフィードバックをいただいた。概してA,Bの評価をいただいたご意見の中で、本校の自己評価が、「目標」に対してではなく、「具体的な教育活動の実践」に対してである傾向があるとのこと指摘もいただいた。また、教科の評価においては、教科内容や達成された内容に加えて、授業のやり方についても言及を望む声もあった。さらに、客観性と透明性を高める目標のためには、保護者が「自己評価」にアクセスしやすくすべきとのこと意見もあった。

# 2021年度 学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

## 1. 教科における自己評価

評価方法	年度当初に各教科の学年、分野毎に授業担当教員が授業計画と目標設定を行い、資料を作成する。 年度末に、授業計画の実施状況と、目標の達成度について授業担当教員が4段階で評価を行う。 A 達成できた（80%～100%）／B ある程度達成できた（60%～79%）／C あまり達成できなかった（40%～59%）／D 達成できなかった（～39%）
総合評価規定	各教科の学年、分野毎の評価を集計し、以下の計算で算出されたものを総合評価とする。 各分野と学年の評価を数字に換算 A→4 B→3 C→2 D→1 その平均を総合評価点とし、下記基準でアルファベット4段階とする。 A 達成できた（総合評価≧3.2）／B ある程度達成できた（総合評価≧2.4）／ C あまり達成できなかった（総合評価≧1.6）／D 達成できなかった（総合評価<1.6）

教科	目標と具体案	結果	次年度への課題と対策	中期的な課題	前回評価	今回評価
国語	<p>国語科は下記のゴールにしたがって、各学年で実践の形態を考えて教科指導を行った。「具体案」は右記「結果」に寄せることで示した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる。</li> <li>すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する。</li> <li>ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児のエンパワーメントを行う。</li> <li>包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用ディーセント・ワークを促進する。</li> <li>強靱（レジリエント）なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進・研究開発従事者数の増加を図る。</li> <li>各国内及び各国間の不平等を是正する。</li> <li>包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する。</li> <li>持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する。</li> <li>陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する。</li> <li>持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する。</li> </ol>	<p>【全学年】 年間を通じて実施した漢字テスト(4) 特に中等部では GIGA PC の活用を踏まえ、Zoom による ICT の推進(9)</p> <p>【1年】 新聞記事の書き写し・近現代作家の書簡にふれる・自分の「ベストプレイス」発表(4) 芥川「トロッコ」・鷗外「木精」指導の論文化(4)</p> <p>【2年】 「おくのほそ道」の気候・地形調査発表 江戸時代の旅事情を知ることを通して観光・交通・経済事情を学ぶ(8・9・11・14・15)</p> <p>【3年】 戦争関連の文学作品、映画、ドキュメントによる平和学習。「黒い雨(井伏鱒二)」「輝ける闇(開高健)」 海外の学校での経験を描いた「パールハーバーの授業(猪口邦子)」「隠されて被爆米兵」(16) 「字のない葉書(向田邦子)」(5) 江戸の生活のリサイクル事情、江戸の識字率の高さ、他言語との違いから理解する口語文法(4) 「職人・プロフェッショナル」の仕事に対する向き合い方(8)</p> <p>【4年】 ジェンダーギャップについての記事のグラフから小論文を書く。(5)</p> <p>【5年】 能狂言鑑賞教室(4) 評論や「現代文キーワード読解」(1・10・16) 「史記」項羽と劉邦から人々の苦悩や戦争の悲劇を実感する。(16)</p> <p>【6年】 丸山真男「であることとすること」から自由・権利の原理を学ぶ(10・16) 「見出しをつける」新聞を知ること主権者としての意識を育てる(16) 「忍び扇の長歌(西鶴諸国ばなし)」「竹芝寺伝説(更級日記)」身分の高い女性が低い男性との愛を貫く話(5) 江戸時代には寺子屋があって識字率が高く、庶民が文学の担い手であったこと。この時代に被支配者階級の、しかも女性が本を読めたのは世界史的に見れば希有なことであることを強調した。(4)</p>	<p>一見関わりのないように思える国語科の営みが、SDGs と如何に繋がってきていたか、如何に繋げていくかを、より深い所で考察し、共有しながら課程を進めること。</p>	<p>高等部での新カリキュラムにおいて、5・6年を見据えた編成を考えること。</p>	B	A

<p style="text-align: center;"><b>社会</b></p>	<p>中等部では地理・歴史・公民の三分野にわたり、バランスよく基礎学力を習得することで、多角的かつ幅広く社会をとらえる視点を持つことを目標とする。</p> <p>高等部では、学部選択を見据えて各科目高度な専門的知識を習得するばかりでなく、習得した知識を用いてアウトプットできるようにプレゼンテーションや論述の機会を多く設ける。</p> <p>史跡や企業への見学を実施し、実際に目にすることにより、授業で習得した知識について自ら考え、理解する機会を設ける。</p>	<p>中等部では、教科に対する意欲はあるものの、中学入試で社会を受験していない生徒を中心に知識の定着がなされていない感触がある。</p> <p>SDGs への意識を高めるため、2年次の地理分野では、海の豊かさ・陸の豊かさについて考えるとともに、公民分野では、ジェンダー平等や人と国の不平等について、また平和と公正について、裁判例を元に考察してきた。初等部・帰国生・一般生と、多様なバックグラウンドを持つ生徒の意見によって議論が活発化し、物事を深く考察するきっかけとなった。</p> <p>高等部では、自らの考えを論理的にアウトプットできる生徒を育てることができている感触を持つ一方、基礎知識の薄さは否めない。また、学年が変わると、それまでに学習した内容に関連させて習得することができていない生徒が多く見受けられる。</p>	<p>中等部では、2年生でのカリキュラム変更に向けて、引き続き全ての生徒のバランスのよい基礎学力の習得を目標とする。また、中学受験勉強からの脱却...つまり、即問即答ではない頭の使い方を学ばせ、高等部から大学進学に向けて、筋道を立てられる思考力の育成が求められる。プレゼンテーションやレポート・論述問題により、その課題に取り組みたい。</p> <p>高等部では、引き続き大学における「研究活動」をターゲットとし、6年生「論文実習」の履修を前に、論理的思考を養い、客観的論述の訓練をすることが必要になる。</p>	<p>横浜初等部との連係の方法を模索しつつ、中高6年間のカリキュラムについて引き続き検討を行う。</p> <p>帰国生などを中心とする基礎知識の未定着に対し、どのような対策を講じるべきかの検討が必要である。</p> <p>上記二点は「知識量」の増加につながるが、一方で目の前の点数にこだわりがちな生徒が多い中、いかにアカデミックな好奇心を植え付けていくか、総じて「知識量」と「学問への入り口」の両立が課題といえる。</p> <p>高等部については2022年度から地理総合、歴史総合が必修科目となる。また、各分野の「探究」科目の履修が始まる。現行の高等部の社会科学カリキュラムについて改編が必要となる。</p>	B	B
<p style="text-align: center;"><b>数学</b></p>	<p>中等部の代数分野では、3年間を通じて基礎的な計算力の定着を目指すとともに関数の考え方を理解し、高校数学の土台を作ることを目標とする。幾何・確率統計分野では、数学的な美しさを発見し、データを活用することによって問題発見、問題解決力を身につけることを目標とする。中等部では、1、2年生において、一人の教員が4時間を受け持っている。</p> <p>高等部の4、5年では、全員が代数・幾何・解析・確率統計の基礎を学び、幅広い知識を身につける。6年I類では、経済学などを学ぶために必要な微積分・統計を、II類では同じ分野を理工学部・医学部・薬学部への進学を視野にいれ、より深い内容まで学ぶ。I類・II類を問わず、数学を用いて客観的に物事をとらえ、論理性をもって考えを説明できる能力を養うことを目標とする。また、データサイエンス教育の充実を図り、AI時代に活躍できる人材の育成を目指す。</p>	<p>2021年度はオンライン授業はわずかで、ほぼ対面での授業を展開することができた。</p> <p>中等部生については、授業の冒頭での計算練習が定着し、授業前のよいウォーミングアップとなっているとともに、各自の理解不足や計算ミスの癖などを把握できる機会となっている。</p> <p>I、2年生については、一人の教員が4時間すべてを教えることにより、生徒の理解度、到達度を把握しやすくなり、個別指導に活かせるメリットを感じている。また、宿題の量を適切に管理できるようになるとともに、試験の科目数を減らすことによって学習への負担の軽減につながっていると感じている。</p> <p>高等部については、しっかりと時間数を確保することによって、理工系学部へ進学する者はもちろんのこと、文系学部に進む者にとっても数学的な思考を身に付け、進学後に必要とされる基礎的な数学力を備えることができていると考えている。4年生の数学Iでは、1クラス約20名ずつの少人数教育が実施2年目となり、一人一人の生徒との距離が縮まり、各自の理解度や勉強への取組み姿勢を把握しやすくなったと感じている。</p> <p>また開校以来力を入れている統計教育についても、その手応えを感じることができるようになってきている。</p>	<p>1年生では試験的にデジタル問題集の導入を行う。生徒の演習や宿題の管理、生徒へのフィードバックの向上を主たる目的としている。効果を検証していきたい。</p> <p>4年生では、初等部1期生が進学するとともに、新しい学習指導要領の下での授業展開となる。入試、入学の形態も変わるが、これまでの本校での教育レベルを維持し、より数学に興味をもつ生徒が増えるよう努力していきたい。</p> <p>引き続き、IT機器の利用やアクティブラーニングの試験的な導入を積極的に進めていきたい。</p>	<p>新学習指導要領で求められる主体的、対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進するとともに、数学的な活動を通して数学の世界と現実の世界とを行き来させ、生徒の学習への動機付けを強固なものとするよう、カリキュラムマネジメントを行っていく。</p> <p>政府の掲げる「数理・AI・データサイエンス」人材の育成に向けての教育改革も意識し、DX社会に活躍できる人材の育成を数学的側面から推進していきたい。</p>	B	B
<p style="text-align: center;"><b>理科</b></p>	<p>中等部は理科室での実験および観察、野外での観察などを通して、本物に触れることを重視し、それらの実験や観察から自然現象の事象や現象についての理解を深め、法則性を見いだすことを目標とする。また、横浜初等部からの受け入れを機に目標達成のさらなる向上を目指し、継続して少人数教育（1年、2年）を試行する。</p> <p>高等部ではリベラルアーツとしてのサイエンスの基礎と位置づけ、物理、化学、生物、地学の全分野の領域を必修とし、生徒の興味や進路希望に柔軟に応えられるよう選択科目を設置している。これらの授業では実験や観察を通して基礎理論の理解を深めるだけでなく、最新のトピックに触れたり、大学や卒業生と連携したりすることで高度な内容にも取り組むことを目標としている。</p>	<p>2021年度は、一部オンライン授業期間もあったが、ほとんど対面の授業を展開することができた。しかしながら、感染防止対策により器具使用や授業形態に一部制限があったため、代替となる教材を準備して実施した。</p> <p>今年度の実習における留意事項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業前前後の手洗い。</li> <li>・冷房・暖房を稼働、窓と扉を常時開放して換気。</li> <li>・触れなければならない共有器具や標本を使用した際は、その都度アルコール消毒。</li> <li>・接眼する可能性のあるもの（顕微鏡・望遠鏡・直視分光器・ルーペなど）の使用を極力避け、やむを得ず使用する場合は、原則として保護眼鏡を着用。</li> <li>・生徒の体液（唾液など）を材料とする実験は、原則実施せず。</li> </ul> <p>&lt;総括&gt;</p> <p>中等部では、各学年に応じたやり方で実験や観察を多く取り入れる授業を展開し、生徒の理解を深めることができた。特に1、2年では少人数教育を実施し（2年は1分野・2分野ともに週1時間のみ実施）、十分な成果が得られている。授業で取り組む課題の指導をきめ細やかに、提出物などのフィードバックも間をおかずに行うことができたため、生徒によって異なる理解度・習熟度をつぶさに把握できるようになった。校外学習として、1年、2年は新江ノ島水族館の見学、3年は生田緑地での野外実習を行った。</p> <p>高等部では、例年に引き続き講義と実験をバランスよく実施し、基礎的な理論を理解させた上で、実験手法などの定着をはかることができた。感染症拡大の影響で、唾液を用いた遺伝子検査実験、JAXAの見学は実施せず見送った。</p> <p>&lt;SDGsを見据えた取り組み&gt;</p> <p>物理・化学分野：</p> <p>エネルギーや資源の利用に関わるものとして、脱炭素化、クリーンエネルギー、資源リサイクルなどのトピックを取り上げ、今後のあり方を考察した。</p> <p>生物・地学分野：</p> <p>学校周辺の自然環境調査を実施し、そのデータ分析などを通じて、地球環境の保全と利用について理解を深めた。解が何通りも存在する議題に科学的見地からどのようにアプローチしていくべきか等、問いを投げかけた。</p>	<p>中等部では、2022年度より、1年2年すべてにおいて週4時間ずつ（1分野・2分野、各2時間）の少人数教育を全面施行する。よりよい形の授業スタイルを模索しながら、高等部でのより深い学びにつながるカリキュラム作りを固めていく。</p> <p>高等部では、2022年度に初等部1期生が入学することから、初等部からの一貫教育、本校1年次より実施した少人数教育の成果がどのように表れるかを見極めたい。また、新学習指導要領の実施にあわせて、これまで学校設置科目であった4年次の地球科学（1単位）が増単され、地学基礎（2単位）として新たにスタートを切る。物化生地4領域すべての基礎科目を必修としたことで、自然科学の基礎を斑なくすべての生徒に身につけさせ、多様な進路選択を後押しできるようなカリキュラムを展開したい。</p> <p>なお、2020年度から続いている感染防止策による授業制限を受け、各学年で本来学ぶべきであった内容が、十分に扱えていない部分もある（顕微鏡操作の習熟など）。6年間の一貫教育の中で、過年度の不足分を補っていく必要がある。</p>	<p>中等部では、引き続き、初等部からの一貫教育を活かした授業展開を目指す。初等部での学びを経てきた者、帰国のため入学前に理科を学んでいない者、入試のため理科を手厚く学んできた者など、バックグラウンドの異なる多様な生徒を1つの集団に抱えて授業を展開する上で、知識量の差や、実験・観察に必要な技術習熟の差をいかに補っていくかが、大きな課題となっている。2019年度より継続している少人数教育の特性を活かし、個人個人へのきめ細やかな指導を行うにあたり、より効果的な手法を模索していきたい。</p> <p>高等部では、初等部生の入学や新学習指導要領を踏まえ、新たなカリキュラムを展開していく。大半の生徒が中高6年間の理科を一貫して本校で学ぶことになっていくので、各学年で積み上げるべき基礎をより明確化し、大学進学時の到達度を高められるような教育実践をはかりたい。</p>	A	A

<p>音楽</p>	<p>中等部は基本的な力を養うことに重点をおき、指導する。基礎的な音楽理論および音楽の歴史について学習し、音楽への理解を深める。また演奏や鑑賞を通して、音楽活動をする楽しさを感じることを目的とした。</p> <p>高等部では、より専門的な音楽の理解を深めるよう促す。作曲などを通して、より深く音楽理論を理解できるようにする。また打楽器やギター演奏、西洋音楽史などを通して音楽の本質に触れることを目的とした。</p>	<p>分散登校等に伴い、対面の授業ができないときには、オンラインにて、楽典、鑑賞、音楽史などの学習を行った。</p> <p>今年度は新型コロナウイルス感染予防のため、例年行っている歌唱・リコーダーの実技が実施できず、打楽器、ギターのアンプの活動をを行った。</p> <p>6年生の選択授業「音楽表現」でも、例年は声楽のレッスンを行っているが、今年度は感染予防のため、声楽を中止してヴァイオリンのレッスンを取り入れた。</p> <p>表現活動の内容は大きく変わったが、音楽をする喜びを感じることができた生徒は多く、一定の成果が見られた。</p>	<p>感染予防のため、歌唱・リコーダーといった呼吸を使う活動は注意が必要である。学校医と連携をとりながら、より効果的に学習ができる授業内容を再考する必要がある。</p>	<p>感染予防のため、どうしても座学に偏りがちになってしまう。表現・理論・鑑賞の各領域のバランスの取れた編成を考える。</p>	<p>B</p>	<p>B</p>																																
<p>美術</p>	<p>身近な物や風景をモチーフとし、絵画や塑像の基本的な制作技術、またそれに伴う観察力の成長を促す。また与えられたテーマから自由に発想し、そのイメージを作品として成立させる能力を養う。</p> <p>中等部段階では経験のある素材を使用し、基礎力の向上と表現の幅を広げる。</p> <p>高等部では専門的な素材を使用し美術の知識を深めながら作品の成立を目指す。年代に応じて技術や素材を発展させ幅広い経験を得ながら、豊かなイメージ力と再現能力を養う。</p>	<p>前年度同様の新型コロナ対策をしながらの授業を行った。</p> <p>その中で前年度の課題でもあった自宅での課題、授業回数が減少しても課題の完成度を上げる工夫を行った。</p> <p>中等部は、ほぼ例年通りの課題をこなした。ただ1年生の自身の顔を木版画で表現する課題はマスクを外すことができないためあらかじめ自宅で撮影した顔写真を持参させた。3年生の自身の顔を立体（粘土を使用）で表現する課題は、パン、果物、野菜を立体で表現する課題に変更した。</p> <p>高等部は、ほぼ例年通りの課題をこなした。</p> <table border="0" data-bbox="795 926 1694 1142"> <tr> <td>1年（6クラス）</td> <td>1期 塑像（手）</td> <td>2期前半 版画（顔）</td> <td>2期後半・3期 水彩（風景）</td> </tr> <tr> <td>2年（6クラス）</td> <td>1期 スクラッチ</td> <td>2期平面構成</td> <td>3期素描（靴）</td> </tr> <tr> <td>3年（6クラス）</td> <td>1期 模写</td> <td>2期 静物画</td> <td>3期 塑像（静物）</td> </tr> <tr> <td>4年（3クラス）</td> <td>1期 油彩</td> <td>2期 陶芸</td> <td>3期 石膏デッサン</td> </tr> <tr> <td>4年（3クラス）</td> <td>1期 陶芸</td> <td>2期 油彩</td> <td>3期 石膏デッサン</td> </tr> <tr> <td>5年（3クラス）</td> <td>1期 シルクスクリーン</td> <td>2期 陶芸</td> <td>3期 細密描写</td> </tr> <tr> <td>5年（3クラス）</td> <td>1期 陶芸</td> <td>2期 シルクスクリーン</td> <td>3期 細密描写</td> </tr> <tr> <td>6年 選択授業</td> <td>陶芸 古典技法</td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <p>陶芸では毎年大量の削りカスや失敗した粘土が出るが、本校は大型の鑿岩機1台、大型ドレン機2台を有しており、ほぼ100パーセントの再利用ができています。</p> <p>また、これらの粘土の再生を授業内で生徒にも参加させることにより資源の再利用の大切さも学んでいる。</p>	1年（6クラス）	1期 塑像（手）	2期前半 版画（顔）	2期後半・3期 水彩（風景）	2年（6クラス）	1期 スクラッチ	2期平面構成	3期素描（靴）	3年（6クラス）	1期 模写	2期 静物画	3期 塑像（静物）	4年（3クラス）	1期 油彩	2期 陶芸	3期 石膏デッサン	4年（3クラス）	1期 陶芸	2期 油彩	3期 石膏デッサン	5年（3クラス）	1期 シルクスクリーン	2期 陶芸	3期 細密描写	5年（3クラス）	1期 陶芸	2期 シルクスクリーン	3期 細密描写	6年 選択授業	陶芸 古典技法			<p>登校時の道具の扱い（消毒等）を検討。</p> <p>授業前後の手洗い・消毒が疎かになりがちであったため再確認が必要。</p>	<p>全ての学年が6クラス体制となる。</p> <p>3教室をフレキシブルに活用する為、道具を各教室に配置できるようにする。</p> <p>コロナ以前の状態がいつになるか、もしくはコロナ以前には戻らないのかを見極める時期に備えた対策は必要。</p>	<p>B</p>	<p>B</p>
1年（6クラス）	1期 塑像（手）	2期前半 版画（顔）	2期後半・3期 水彩（風景）																																			
2年（6クラス）	1期 スクラッチ	2期平面構成	3期素描（靴）																																			
3年（6クラス）	1期 模写	2期 静物画	3期 塑像（静物）																																			
4年（3クラス）	1期 油彩	2期 陶芸	3期 石膏デッサン																																			
4年（3クラス）	1期 陶芸	2期 油彩	3期 石膏デッサン																																			
5年（3クラス）	1期 シルクスクリーン	2期 陶芸	3期 細密描写																																			
5年（3クラス）	1期 陶芸	2期 シルクスクリーン	3期 細密描写																																			
6年 選択授業	陶芸 古典技法																																					

<p>体育</p>	<p>生徒には体を動かす喜びを体験させ、生涯にわたって運動に親しみ取り組むきっかけとし、社会生活を営む為の基礎作りを目指す。</p> <p>基礎体力の強化に加え、体のバランスや調整力を養う運動も取り入れる。</p> <p>安全に対する知識・行動・判断力をつけ、周囲への配慮もできるよう、道德教育的側面も意識しながら集団の中での態度、姿勢についても指導し、バランスのとれた教養育成に教科として貢献する。</p>	<p>3学期最終1週間はオンラインでの授業となったが、それ以外は対面での実技授業を展開することが出来た。</p> <p>中高共に安全面、コロナ感染予防対策を最優先に、さらに熱中症対策を考慮しながら授業を実施。運動を楽しむために必要な基礎技術習得を意識し、生徒の低下した体力回復・向上にも重点を置いた。</p> <p>4年保健 ○現代社会と健康（私たちの健康のすがた、健康のとらえ方、生活習慣病とその予防、食事・運動・喫煙・飲酒・薬物乱用と健康） ○生涯を通じる健康（思春期・妊娠・出産と健康、家族計画と人工妊娠中絶）</p> <p>6年保健 ○感染症の種類・仕組み・予防について ○欲求と欲求不満 ○心身相関とストレス ○性機能とその成熟・妊娠と出産</p>	<p>安全性を確保し、感染予防対策を継続しながらも、教育効果の高い授業内容を検討する。またそれらを、主体的に実践出来る生徒育成が課題である。</p>	<p>様々な制約が継続されることを想定し、授業に對しての興味を失わず、体育で養われるべきものが、失われないような授業内容を検討して行く。</p>	<p>B</p>	<p>B</p>
<p>技術</p>	<p>実践的・体験的な学習を通じ、知識と技術を習得させ、生活する能力と実践的な態度を育てる。1年生では、情報に関する内容、2年生では、加工分野のうち製図・木材加工を、3年生では、エネルギー変換の分野で電気について、加工分野では金属などを扱っていく。</p>	<p>1年生 1学期 パソコン入門 2学期 情報モラル、プログラミング入門 3学期 プログラミングでクイズを作ろう</p> <p>2年生 1学期 製図学習 2学期 材料強度の学習（ペーパーブリッジコンテスト）、木材の加工 3学期 3DCAD での設計、栽培学習（豆苗の育成方法）</p> <p>3年生 1学期 金属の加工（鋳造） 夏休み 機械学習（からくりおもちゃの製作） 2学期 金属の加工（金属板の加工） 3学期 電気分野（エコキューブラジオの製作）</p> <p>昨年度のオンラインによる学習時での体験を生かし、これまでの学習内容に一部導入していきました。</p>	<p>感染予防の徹底とネット環境を利用した学習方法の充実化。 授業中に使用する工具の入れ替え。</p>	<p>作品保管場所の確保に苦労していて、取り組むことが出来る教材に制限が出ている。今後改善されると、より幅広い学習内容に取り組めるので、検討していきたい。</p>	<p>B</p>	<p>A</p>
<p>家庭</p>	<p>中等部では生活に関わる基本的な知識・技術の習得をめざす。栄養や衣服の材料、管理のしかた、子供の成長と発達、住環境の整え方などについて学び、調理実習や衣服制作など実践的な実習を行っている。</p> <p>高等部ではさらに資源やエネルギーの効率的な利用について考え、持続可能性を意識した生活ができることをめざす。また、子供や高齢者など様々な世代の人々についての理解を深めることをめざし、妊婦体験実習や高齢者体験実習などを行っている。学んだことを実生活に生かせるように考えさせるグループワークを行う。</p>	<p>今年度は昨年よりも対面授業の時間が増えたが、オンライン期間もあったため、1、4年生の調理実習は回数を減らすしかなかった。実施できた実習の時も試食は教室で行うなどコロナ対策に腐心した。2年生の被服製作実習はオンライン期間の影響で完成が遅れたが、オンライン期間をうまく利用し、教科書の学習を進めることで、ほぼ予定通り行うことができた。TT(チーム・ティーチング)の効果により、理解度と完成度は高く、生徒の取り組みも熱心であった。</p> <p>3、5、6年もオンライン期間に教科書の学習を進めることで、実習の機会を最大限確保できたと思う。</p> <p>家庭科では従来からSDGsを意識した教育を行ってきた。1、4年では食品ロスやゴミ問題などを食生活分野と併せて積極的に扱っており、ゴール2、ゴール6、ゴール7、ゴール9、ゴール10、ゴール11、ゴール12、ゴール13、ゴール14、ゴール15、ゴール17に根ざした教育を行っている。3、5年では消費生活を取り上げることにより、特にゴール12のつくる責任・つかう責任について考え、また、5年のおもちゃ製作実習は持続可能な社会作りに直結する総合的な取り組みとなっている。高等部の授業ではジェンダーや働き方、格差や経済についてもグローバルな視点で扱い、ゴール1、ゴール2、ゴール3、ゴール4、ゴール5、ゴール6、ゴール8、ゴール9、ゴール10、ゴール12、ゴール16、ゴール17に根ざした教育を行っている。5、6年生の妊婦体験・高齢者疑似体験により、他者への関心、理解や思いやりを育み、パートナーシップを身につけ、よりよい社会作りに役立つ人材作りに貢献している。6年生では住生活について学び、住み続けられるまちづくりについても考えさせる内容となっている。</p> <p>施設面の改善も一部ではあるができた。細かい作業を行う被服室が暗かったため、照明設備の交換をし、必要な明るさを確保できた。スピーカーの雑音にも悩まされてきたが、解決することができた。これまで手つかずであった準備室も洗濯機を新たに交換し、調理設備を改修することができた。同時に室内の改装も行い、機能的にすることができた。</p>	<p>コロナが落ち着くまでは、様々な制限があると思うが、用具をこまめに消毒したり、作業や試食時の注意を徹底したりすることで、できる限り実習機会を確保したい。2年生被服実習のTTは効果絶大なので、今後も継続したい。</p>	<p>被服室が新設され、授業が行いやすくなった面もあるが、実習をするには狭いのが悩みである。一部の作業は廊下で行わざるを得ず、そのための環境整備をしていきたい。改善されたところもあるが、暖房設備などの不備がまだ残っているため、早急に対応していきたい。次は調理室も食器棚を使いやすく、効果的な授業が実施できるようなものに更新したい。</p>	<p>B</p>	<p>A</p>

<p>情報</p>	<p>中等部では、基本的なコンピュータの使い方（タイピング、文書作成、表計算、プレゼンテーションの資料作成）やクラウドを利用した課題確認・提出作業、プレゼンテーションやポスターセッションを通して、発表のスキルなどを身に付けさせる。また、マインドマップを利用したプログラミングを通して、センサーの仕組みや身の回りにあるプログラムによって制御されているものにも興味を持たせた後、言語によるプログラミングにも取り組む。プログラム体験時には、フローチャートを書くことで、順序・手順を考えながら作業を行う大切さを理解させる。</p> <p>高等部では、DTV、DTPを通して、物事を表現する手法の幅を広げるとともに、物事を発信する力、人に伝えるものの作成方法を身につけさせる。また、プログラミング作業を通じて、論理的思考を養い、そして知的財産、著作権、個人情報、ビッグデータなどをキーワードとしながら、情報化が社会に及ぼす影響について理解を深める。</p> <p>情報モラルについては、中等部・高等部ともに状況や年齢に合わせて定期的に呼びかけ、考える機会を設ける。</p> <p>クラウドの利用に関しては、中等部・高等部ともに積極的に利用していく。</p>	<p>2021年度は、一時的にオンラインでの授業を行うことがあったが、対面授業、オンライン授業どちらも問題なく行うことができた。対面授業の際は、共用パソコンを使用するため、昨年度と同様の新型コロナウイルス感染症対策を取りながら授業を行った。</p> <p>中等部1年生には、4月初回の授業でGIGAスクール構想を活用して導入した端末を1人1台配布した。4～5月で1年生全員が自宅でも学校でも安心して端末を活用できるようになるための授業を行い、いつオンライン授業に切り替わっても大丈夫なような対策をとった。</p> <p>中等部2年生全員が2週に1回のペースで取り組んでいる5分間文書入力サンプル文章に、SDGsの「持続可能な開発のための2030アジェンダ」を取り上げ、17の目標を読む機会を設けた。</p> <p>教科の授業を通して身に付けさせたい事柄については、学年に応じたスキル知識が身につけていると感じている。また、授業で得た知識をもとに、他教科、委員会活動、クラブ活動、学級活動等で積極的に上手に利用することができていた。</p>	<p>学習指導要領の変更と、GIGAスクール構想による1人1台端末配布によって、ICT活用スキルや知識の異なる生徒が多く入学してくることが想定される。入学してくる生徒の実態に合わせたカリキュラムを考えながら授業を行っていく必要がある。</p> <p>今後も新型コロナウイルス感染症対策を行いながらオンライン授業と対面実習授業両方を進めていく必要があると考えられるため、両面に対応しながら学年に合わせたスキル・知識が身に付くカリキュラムを行っていきたい。</p>	<p>発展し続けている情報技術・情報社会の実情、入学してくる生徒たちのICT活用スキルの実態に合わせて、内容を常に変えていく必要がある。</p> <p>校内でICT機器活用する環境（場所・施設・机・椅子など）にも目を向け、生徒がICT機器を用いやすい環境整備も行っていきたい。</p>	<p>B</p>	<p>A</p>
<p>英語（α）</p>	<p>Our overall aim is to graduate knowledgeable, responsible, confident and globally-minded communicators who are motivated to continue their English-learning journeys and to make a meaningful contribution to society.</p> <p>Specific aims for Writing and Grammar: Students will become proficient writers of both academic and creative essays, culminating in a 2000-word research paper written in the 6th Year. Particular attention will be paid to academic writing conventions such as citations, referencing and the need to avoid plagiarism.</p> <p>Specific aims for Reading and vocabulary: Students will improve their vocabulary knowledge and refine their reading skills by studying a variety of novels and non-fiction works typically read by students of the same age in English-speaking countries. Sixth year students will study Shakespeare.</p> <p>Specific aims for Speaking and listening: Students will become confident English speakers. They will be able to make professional presentations and participate in debates on increasingly complex subjects. Sixth year students will participate in the Model United Nations, deepening their understanding of international issues.</p>	<p>Although there has been less disruption to classes this year due to the Covid-19 pandemic, we have found that the ICT skills acquired by both teachers and students last year have had a lasting influence, and many of our teachers are continuing to take advantage of the capabilities of Google Classroom to blend in-class and at-home learning in a more coherent way. Some examples include:</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) Sending messages and setting tasks for individual students who have had to stay at home due to Covid-19</li> <li>2) Asking students to upload recordings of speeches done at home during longer holiday periods</li> <li>3) Using Google Docs to facilitate the editing and redrafting of essays</li> <li>4) Conducting hybrid Zoom/in-class when large numbers of students are absent due to Covid 19</li> </ol> <p>Content and Language Integrated Learning (CLIL) has always been a characteristic of the Alpha English curriculum at SFC, and as one of our central aims is to graduate globally-minded, responsible students, there has always been a focus on studying global issues in a way that encourages our students to think critically about the issues that they will face as members of Society 5.0. In recent years, the SDGs have proved to be a useful framework for this purpose, and the following are examples of work done by Alpha students that focuses on the SDGs:</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) Year 1 SLWG. Speech topics focused on Goal 3 (Good Health and Well-Being), 4 (Quality of Education) and 13 (Climate Action). In addition, several TED Talks that focused on topics related to the SDGs were studied, e.g. the talk by UN Patron of the Oceans, Lewis Pugh, which focused on Goal 14 (Life Below Water).</li> <li>2) Year 3 RV. Goals 3 (Good Health and Well-being), 4 (Quality Education), 5 (Gender Equality), and 6 (Clean Water and Sanitation) were frequently addressed in the study of the novel <i>Kindred</i>, by Octavia E. Butler. Goals 16 (Peace, Justice and Strong Institutions), 5 (Gender Equality) 4 (Quality of Education) and 8 (Decent Work &amp; Economic Growth) were addressed in the study of the novel <i>To Kill a Mockingbird</i> by Harper Lee.</li> <li>3) Year 4 SL. Students gave persuasive speeches in which they had to choose a problem that fell under the SDGs, propose a solution, and persuade their audience to take action on it.</li> <li>4) Year 6 MUN. Students play the role of UN ambassadors for the duration of the course. The SDGs are studied in detail, and students make presentations focusing on which of the Goals are most relevant to the countries they are representing. We also discuss the SDGs in the context of Japan, and students are asked to write short essays in which they discuss which Goals they feel Japan is doing well and not so well on. Finally, the course concludes with an in-school conference in which all members of Year 6 Alpha work together to write a mock UN resolution on a global topic of concern. This year the topic was <i>Universal Secondary Education for All</i>, and Goal 4 (Quality of Education) was a major focus of the day.</li> <li>5) Year 6 Discussion and Debate elective class. Each debate is based on a theme, many of which are directly linked to the SDGs, with debaters often making reference to the SDGs in order to strengthen their arguments. Some examples include: Goal 1 (No Poverty) <i>THBT the government should give more medical and financial support to the elderly</i> Goal 5 (Gender Equality) <i>THW make companies hire as many women as men.</i> Goal 7 (Affordable and Clean Energy) <i>THBT all cars should be changed to electric cars.</i></li> </ol> <p>As we find every year, the majority of graduating Alpha students have reached the desired level of English. This is confirmed by the results of external exams such as TOEFL and contests such as the Keio Academic Writing Contest and a variety of speech contests. In recent years, a growing number of students are enrolling in the PEARL, Double Degree and GIGA programs at Keio University, enabling them to further develop their foreign language skills.</p>	<p>The Alpha curriculum is under continuous review and we are constantly looking for new materials to enrich the learning experience of our students.</p> <p>Particular areas of focus for 2022-23 will be:</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>a) To focus on grammatical accuracy in the written work of the weaker Alpha students.</li> <li>b) To ensure that we continue to make the best use of ICT and online learning platforms to complement what takes place in school.</li> <li>c) To further raise awareness of the real-world issues that our students will face in the future.</li> </ol>	<p>The arrival of the first cohort of Keio Yokohama Shotobu students in 2019 brought with it a number of challenges and opportunities for the English department. We now feel we have successfully implemented a challenging and coherent curriculum at the junior high level that addresses the needs of our highly diverse student intake. The first cohort of Shotobu students will move up to senior high school in April 2022, so our medium-term aim is to ensure that an equally challenging and coherent curriculum is developed to suit their needs.</p>	<p>A</p>	<p>A</p>

<p>英語 (β, γ)</p>	<p>中等部、高等部共に英語はコミュニケーションの道具であるという基本理念に基づき、英語での情報を理解する Receptive な言語能力と、また英語で自分の考えを発信していく Productive な言語能力をバランス良く育て、英語を実践的に使うことができる人を育てることを目標としている。6年修了時に英検準1級、CEFR BI レベルの言語運用能力に到達することを目指す。</p> <p>中等部では、3年間で文科省が定める文法事項に加えて、副教材である New Treasure で扱われている発展的な文法事項の学習も進め、さらに、学習した文法事項を発展的に用いた様々な実用的表現、基本的な語彙を身につけることを目標とする。3年次には学校紹介ビデオを作成するグループプロジェクトや、身近な話題に関する1~2分のプレゼンテーションを経験する。</p> <p>中等部入学時の多岐に渡る学習歴及び習熟度に応じてより効果的な授業を行うために、1年、2年では2クラス合同4分割(α1クラス、β2クラス、γ1クラス)の授業展開とする。3年では2クラス合同3分割(α1クラス、β2クラス)の授業展開とする。</p> <p>高等部では英語で情報を発信していくことにも重点を置き、4年でSpeech、5年でDebate、6年でDiscussion/ Drama / MUN を実施している。プレゼンテーションを行う機会も豊富に設けている。原書や英語でのニュースなどを教材として扱うことで、できるだけ実践的な英語力を高められるように工夫している。英語で情報を読み取り、それらを土台として自分の意見を書いていく Academic Writing の能力を高める取り組みも行っている。</p>	<p>生徒、教員共に昨年度初めて経験した授業のオンライン化を経て、今年度は対面授業のカリキュラムに昨年度実施した Google Classroom や Google Meet、Zoom などを活用した以下のような教育活動を適宜取り入れることで、より洗練したハイブリッド型のカリキュラムを構築できた。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) オンデマンド動画による授業配信</li> <li>2) ライブ授業配信</li> <li>3) Google Document での課題・解説プリント配信/課題回収、返却</li> <li>4) 教科書の音声教材の配信</li> <li>5) Google Forms を使ったテストの実施</li> </ol> <p>中等部では従来通り、副教材である New Treasure を用いて基礎的な英文法の学習を進めた。英作文ができることを目標に基本文の暗唱や文法問題のドリルを繰り返し行うことによって、基礎的な英語力がしっかり身につくよう、多様なトレーニングタスクを実施した。コロナ禍のため、授業中十分に発音練習やペア・グループワークをすることができなかったため、音声教材を Google Classroom で提供し、各自自分のペースで発音練習やリスニングを繰り返し行うように指導した。また、Oxford Reading Club というオンライン多読システムを初めて導入し、対面授業の内容と絡めることで生徒に自発的な読書を促すことができた。</p> <p>3年生は前年度(2年次)の2レベル(β, γ)が初めて1つに合流した。1つのクラスの中に様々な英語のレベルの生徒がいる状況であったが、ここまで同じ教材を使って、学習内容を極力合わせてきたためか、スムーズな合流が実現できた。</p> <p>高等部ではより多様な状況における日常会話での英語(海外留学の際に使う英語表現など)、また日常会話にとどまらず、よりフォーマルでアカデミックな英語に触れ、Listening や Reading 能力の向上させることができた。また同時に Listening や Reading のタスクを通して得た情報に基づいて、数多くのテーマについてプレゼンテーションしたり、ジャーナルライティングに取り組んだりした。</p> <p>特に Reading の授業では、教科書の題材のみならず、原書や新聞記事などを題材にすることで、一般的な教科書には出てこないような実用的な英語表現に触れ、語彙力を強化することができた。また、5~6年にかけて行われる Academic Writing の授業を通じて、英語で他者の意見の要約を書く力や、他者の意見を取り入れながら、自分の意見を説得力ある形で表現していく力を養うことができた。</p> <p>SDGs を見据えた取り組みとしては3年次の貧困に関するリーディングとそれに関するタスクや、6年次の TED Talks を用いた、動物を殺すことの倫理問題に関するプレゼンなどが挙げられるが、そもそも教科書の題材が SDGs に関する素材ばかりなので、生徒は常に SDGs を意識して英語学習を進めていると言える。</p> <p>英検や TOEFL などの資格・運用能力試験のための授業を行っているわけではないが、βの生徒であっても、卒業時までには準1級を取得する生徒の割合は30%を超えるまでになっている。</p>	<p>対面授業とオンライン学習のハイブリッドについて、何を対面で扱い、何をオンラインにすれば最も効果的なのか、日々研究していく必要がある。生徒の負担が増えないような工夫も考えていかねばならない。</p> <p>日本人の教員と Native の教員が引き続き密に連携を取り、必要に応じてお互いに授業内容を補い合って、学習内容の更なる定着を図っていく必要がある。</p> <p>中等部3年でのβ, γの合流に関しては、大半の生徒にとっては特に問題が生じないことがわかったが、成績下位者に対するフォローアップの方法とタイミングを考えていく必要がある。</p> <p>高等部では既習の語彙、文法事項を使って Speech、Debate、Discussion、Presentation、Academic writing などを行い、自分の意見を発信していく能力を高めることももちろん大切だが、意味を優先するあまりに生じる文法的誤りを、見過ごしたままにせず、文法的正確さを高めていくための取り組みを、本格的に行うこともまた重要である。</p>	<p>家庭学習時間が不足している生徒への課題の出し方、予習復習の仕方、self-study habit をつけさせる工夫が必要だと思われる。</p> <p>昨年度より副教材として使用している New Treasure シリーズを、それぞれの学年で、引き続きより効果的に教材を活用する方法を考えていく必要がある。</p> <p>高等部の生徒については、ITP-TOEFL を毎年実施しているが、国際基準の英語能力テストである iBT TOEFL は、試験の内容が ITP-TOEFL とは大きく異なっている。将来的には iBT TOEFL が要求する統合的言語スキルをさらに高めることができるように、高等部の英語カリキュラムを再構築していくことが求められる。</p> <p>New Treasure を使い始めて3年目という節目を迎えたので、中等部各学年の Can-do リストを作成し、SFC 独自の最新カリキュラムと評価基準を打ち出す必要がある。</p>	<p>A</p>	<p>A</p>
----------------------	--	---	---	--	----------	----------

2. 各委員会における自己評価

評価方法	当該年度の始業までに、運営計画と、3～5項目の目標設定を行い、資料を作成する。 年度末に計画の実施状況と、各目標項目の達成度について各委員会の構成教員が、A～Dの4段階で評価する。						
総合評価規定	目標項目における評価点の平均点を算出し、以下の基準でアルファベット表記をする。 A達成できた（80%～100%）／Bある程度達成できた（60%～79%）／Cあまり達成できなかった（40%～59%）／D達成できなかった（～39%）						
委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回評価	今回評価
生徒係	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 気品の泉源・知徳の模範となる塾生の育成</li> <li>2. 自宅外通学者の生活指導</li> <li>3. 防災意識の向上・災害時に生徒自身が的確に対応できる知識の習得・交通安全意識の向上</li> <li>4. 防犯意識の向上・情報機器・スマートフォンの適切な活用法の習得</li> <li>5. 生徒の成長に合わせた保健講演会の実施</li> <li>6. 生徒の学校生活全般にわたる支援</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生徒の公共交通機関利用時のマナー・規範意識の向上</li> <li>2. 一人暮らしの会の実施・各寮との連携</li> <li>3. 防災訓練の実施（帰宅方面別の設定／地震火災を想定した訓練）自転車通学者対象の交通安全講習会の実施</li> <li>4. 防犯講演会の実施／学年に応じたスマートフォン利用の仕方の徹底</li> <li>5. 保健講演会の実施（精神保健・スポーツ障害など）</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教員が年間複数回湘南台駅および大学本館前にてバス乗車指導に取り組んだ。本校生徒の整列マナーは向上していると感じられるが、乗車マナーに対する苦情も寄せられ、都度全体への注意喚起を行った。</li> <li>2. 生活上の具体的な問題点や解決法などを上級生から下級生に情報提供する場を設けることができた。</li> <li>3. 方面別帰宅グループの確認および火災発生を想定した訓練を行った。</li> <li>4. 自転車通学者および希望者対象の交通安全講習会を実施した。</li> <li>5. オンラインツールを利用して、校医・カウンセラーなどによる講演会を複数回配信した。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 感染防止対策に則った乗車方法を引き続き促していく。生徒自身も問題意識を高く持ち、規範意識向上に向けて自主的な活動を図ることを期待したい。年度当初および期末試験前にはバス乗車指導を行う予定である。湘南台駅1番乗り場からのバス列を2列から4列に変更する。大学本館前からの直行便(4便)は3番乗り場から1番乗り場へと変更する。</li> <li>2. 寮・学校間の連携を密にし、寮からの情報を生徒係・担任団と共有する。次年度も一人暮らしの会を実施する。</li> <li>3. 次年度も帰宅方面別グループ分け、災害時を想定した避難訓練を実施する。</li> <li>4. 財布・スマートフォン等の貴重品のロッカー管理を徹底していく。</li> <li>5. 次年度もオンラインを併用した形での展開を検討したい。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生徒がキャンパスと駅の間を快適に通学できるような輸送システムを確立する。</li> <li>2. 今後、生徒の精神衛生面における支援の機会が増すと考えられるため、学校と家庭がより連携し生徒を見守る体制づくりを模索する。</li> </ol>	B	B
いじめ防止対策推進室	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. いじめの未然防止のための措置を講じる</li> <li>2. いじめの早期発見のための措置を講じる</li> <li>3. いじめの早期解決のための措置を講じる</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校生活、友人関係にまつわる悩みなどのカウンセリング件数の増加に伴い、カウンセラーの相談時間枠の増加に加え、ステイホーム中から現在においても、電話やweb会議システムを用いた遠隔カウンセリングなどを通じて、防止のための対策を実施した。</li> <li>・学級活動、生徒会活動、道徳の授業やクラブ活動の場において、いじめについて生徒が主体的に考え行動する機会を設けるように努め、道徳性を育む取り組みを進める。</li> <li>・教職員は日常的にいじめの問題に触れ、「いじめは絶対に許されない行為である」という雰囲気を醸成するように努めるとともに、「いじめはどの学校でも、どの生徒にも起こりうる問題である」という認識の下、生徒の行動に目を配るとともに、生徒との信頼関係の構築に努める。また、個人面談を実施するなど、生徒がいじめを訴えやすい体制を整える。</li> <li>・表面化しにくいインターネット上のいじめへの対応策として、情報モラルを身に付けさせる指導を継続的に行うと共に、保護者と緊密に連携・協力し、双方で指導を行う。</li> <li>・生徒がいじめを受けていると思われるときは、直ちに本推進室の会議を緊急開催して情報を共有するとともに対策を講じることにする。いじめを受けた生</li> </ul>	<p>今年度内にいじめに相当する事案は発生しなかったと認識している。引き続き心を痛める生徒がでないよう最大限の防止策を講じるとともに、いじめの兆候を早期にキャッチできるよう努めていく。</p> <p>特に、コロナ禍においては、コロナバッシングと呼ばれる濃厚接触者や感染者に対する誹謗中傷が起らないように努めた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中高併せて36クラスと学校規模は大きいですが、一人一人の生徒の様子を丁寧に観察する姿勢を堅持するとともに、いじめ事案が発生しなかったことに安心感を抱くことなく、緊張感を持続していくよう、教員集団に促していく。</li> <li>・情報端末の進化に伴う新たな問題や、コロナ禍でオンライン化が進んだことよって生じる問題の発生を未然に防ぐため、情報収集に取り組み、情報モラルに関する指導力向上をよりいっそう図っていく。</li> </ul>	<p>いじめの形態は社会背景に影響を受けて変化することから、教職員が継続的に研修を行なう制度作りが求められる。また、教職員のコミュニケーションをより緊密にとれる体制を整えていく必要があると考えている。</p>	A	A

		徒を守り、安心・安全な学校生活を送ることができるよう必要な支援を行う。いじめを受けた側、行なった側双方の生徒および保護者に対し、事実関係を速やかに伝え、適切な対応が行えるよう、保護者の協力を求めると共に、継続的な支援を行う。					
文化祭	<p>本校の文化祭の目的は、文化系クラブ・クラス・有志団体・教員が企画を行うことにより、「学校内での交流を深めるとともにその活性化を促す」こと、「本校の校風、活動状況を内外へ紹介する」ことである。また、本校の文化祭は、「文化の薫り」を基盤とし、テーマに基づく統一性のあるものを創り上げ、本校生徒や来場者の方々に我が校の「薫り」を感じてもらうことを目指す。2021年度文化祭実行委員会は、これら文化祭の目的を具現化すべく、下記を目標とした活動を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.文化祭の運営、管理をはじめ、規則の取り決め、出展企画の活動の統括を行う。</li> <li>2.クラブ、クラス、有志、教員による各出展企画の、調整および支援を行う。</li> <li>3.引き続き、感染症対策を最重点事項とする。</li> <li>4.オンライン文化祭であることを活かし、より一層の生徒の文化活動活性化の機会となることを目指す。</li> <li>5.準備期間を見直し、編集・配信を担当する生徒の負担軽減に留意する。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1.生徒および来場者の新型コロナウイルス感染防止を最優先事項とする。従って、文化祭の形態を2020年度に引き続きオンライン開催とする。</li> <li>2.学校行事として位置づけられた文化祭の意義を具現化すべく、文化祭に向けた準備作業および文化祭における、生徒の文化活動の活性化と学内の文化交流の深まりを目指す。従って2021年度は、オンライン文化祭という制約下であっても、全生徒が企画制作に参加する形態をとる。</li> <li>3.在校生および対外への本校の文化発信が、オンライン文化祭という形態であっても十全に行われることを目指す。</li> <li>4.2021年度オンライン文化祭においては、編集および配信準備期間を確保する目的で「準備日」を9月末に3日間とり、各企画団体の企画制作および撮影時間に充てる。撮影した映像の編集・企画サイト制作には1ヶ月の充分な期間をとり、さらに本祭前日には「準備日」を1日設け、本祭1日目1の朝10時に向けた実行委員会の配信最終作業を行う。</li> <li>5.在校生間での感染リスク減を徹底すべく、文化祭に向けた準備期間の感染症対策と教員による見守りを行う。</li> <li>6.在校生間での感染リスク減を目標とし、在校生についても文化祭当日はオンライン参加とする。</li> <li>7.生徒の文化活動を活性化すべく、且つ、各企画団体の希望実現を目指し、実行委員会は企画設計および実施への助言を行う。低学年に対しては特に、企画設計段階からオンライン配信準備までの継続的支援を行う。</li> <li>8.生徒の文化活動を活性化すべく、アカデミックな活動を行う有志企画の出展を補佐する。</li> <li>9.文化祭実行委員会企画にて、文化祭出展企画外の有志生徒文化活動発表を行い、学内生徒の文化活動を活性化するきっかけとする。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1.2021年度は、全学年全クラス・ほとんどの文連クラブ・複数の教員企画・有志企画が、オンライン文化祭での企画配信を行った。前年度は文化祭実行委員会が各企画のコンテンツを取り纏めてWebサイトを作成したため、委員会に多大な負担がかかっていた。反省に基づき、今年度は次の通りWebサイト作成についての変更を行った。低学年を含めた生徒が企画サイトを自作できるGoogleサイトを採用し、各企画がWebサイト制作までを完了して提出、文化祭実行委員会がURLをとりまとめて公開した。Googleサイトはプログラミング不要の簡単なWebサイト作成サービスであり、生徒が授業で使用しているGoogleドキュメントと似た要領で操作することが可能であったため採用するに至った。文化祭実行委員会がGoogleサイトを操作するためのマニュアルを制作し、また、中等部生の企画やWebサイト作成に不安のある企画についてはサポートを行った。</li> <li>2.2021年度は、文化祭Webページの公開を、一般公開・内部限定公開ともに2022年1月10日まで続けた。学外には学校HPにて本祭2日目11/14(日)16時に告知し、在校生には11/15(月)HR放送にて伝達した。</li> <li>3.2021年度のオンライン文化祭文化祭Webページ閲覧者数(本校関係者を含む。同一アカウントからの複数回アクセスは、まとめて1回としている。)は、11/13(土)閲覧者数:5,200、11/14(日)閲覧者数:2,900、本祭二日間での合計閲覧者数:6,700、11月中の閲覧者数:8,300、12/1~12/12の閲覧者数:700であった。端末数(同日中に、同じ端末から複数回アクセスされた場合はカウントなし。本校関係者も含む。)は、11/13(土)3,921 端末、11/14(日)2,247 端末であった。</li> <li>4.2021年度においても、「新型コロナウイルス感染症対策指針」を慶應義塾保健管理センターの指針に</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1.引き続き、感染症対策を最重点事項とする。</li> <li>2.オンライン文化祭が2年続き、通常の文化祭を経験している生徒が少なくなっている。文化祭実行委員会においても、中心となって文化祭を運営したことのある生徒が在籍するのは、2022年度が最後である。これまでの経験を引き継いでいくことも、重点事項とする必要がある。</li> <li>3.生徒達がオフライン・オンライン双方の強みを活かした柔軟な発想で企画立案および制作に取り組むことで、本校文化祭が生徒のより一層の文化活動活性化を推進することを目指す。</li> <li>4.編集・配信を担当する生徒の負担軽減に引き続き留意する。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1.本校文化祭の目標を達成すべく、状況に応じた文化祭形態を考案する。</li> <li>2.文化祭が、全校生徒の持つ創造力・表現力の素地へと働きかける機会となることを目標に、実行委員会の活動を補佐する。</li> </ol>	B	B

		<p>10. 文化祭実行委員会企画にて各企画を紹介することにより、学内文化交流の深化を促す。</p> <p>11. オンライン一般公開における個人情報漏洩を回避する。</p>	<p>基づき策定し、文化祭に関わる全ての準備・作業において遵守するよう、全校生徒に呼びかけた。各企画団体には、企画考案と併せて感染症対策計画を立てることを義務とし、放課後作業、準備日作業いずれにおいても、各企画顧問教員の見守り指導の下で企画制作を行った。備品・消耗品として、間仕切りとして使用する貸出用透明アクリル板、消毒用品等を用意し、距離の確保、消毒の徹底を行い、感染防止に努めた。</p> <p>5. オンライン文化祭2年目であることにより、前年度に増して、多くの企画で生徒の持つ創造力・表現力が発揮された。</p> <p>6. 1年生から6年生までの全ての企画団体が、自ら編集作業および企画サイト制作を行った。本校生徒の情報スキルを、存分に発揮することとなった。</p> <p>7. 文化祭実行委員会企画においては、オンライン開催であっても生徒達の学校への帰属意識を高めること、学年を超えた学内交流を行うことを目指し、実現できていた。</p> <p>8. 2021年度は、年度当初に文化祭の形態をオンラインとすることを決定した。企画書提出および文化祭準備日を例年より一ヶ月程度早め、10月の1ヶ月を、各企画が編集作業およびサイト制作に充てられるようスケジュールを組んだ。このことにより、多くの企画団体においては余裕を持って企画を完成させることができていた。とは言え、一部の企画においては、夏の感染状況の悪化等により予定通りの活動ができず、編集作業やサイト制作が期日間際にずれ込むこととなった。引き続き、生徒の負担軽減を踏まえた企画制作スケジュールを、企画顧問および実行委員会はサポートする必要がある。</p>			
--	--	---	--	--	--	--

教務	<p>1. 授業や試験、学期末の特別日程などが円滑に行われるように事務処理を行う。</p> <p>2. カリキュラムに基づき、教科選択が適正に行われるように環境・手続きを整備し、実施する。</p> <p>3. 生徒の出欠席の状況を管理する。</p>	<p>1. 授業や試験の時間割・使用教室一覧などを作成する。オンライン授業を円滑に行う</p> <p>2. 次年度の5年生第二外国語の希望調査を行なう。</p> <p>3. 次年度の6年生選択科目・第2外国語の調査を行う。</p> <p>4. コンピューター委員会と連携して、電子出席簿の運用を行う。</p> <p>5. 教室の予約表や備品の管理を行なう。</p> <p>6. コロナ禍で、定期試験の時間間隔を30分を継続したが、1学期期末試験からは、元の20分に戻した。</p>	<p>1. 初等部3生まで入学し、はじめて中等部3学年が6クラスで教室の運用を行った。義塾の少人数教育推進の一環で、少人数展開の授業も多く、時間割の作成が難化した。1月後半のオンライン授業も教員の授業技術の習熟で混乱無く実施した。</p> <p>2. コロナ禍であったので、昨年に続いて各語種の説明会に代わりオンデマンドのガイダンスを配信して参考にさせた。9月予備調査、1月本調査を実施した。</p> <p>3. コロナ禍での出欠集計が、欠席事由の増大で複雑になっている。雨天等でのバス遅延が多く、生徒の登校時の負担が増大した。</p> <p>4. 教室のWeb予約システムは2年目となり定着した。</p>	<p>1. 年度当初に変更が生じないよう、時間割係・各教科と連携をしていく。分割授業やTTも増え、教室稼働率は、さらに高まった。普通教室を増やしたい。</p> <p>2. 4年生に対してのガイダンス、希望調査を今年度同様行なう。コロナ禍で、多くの説明会や講演会がオンラインやビデオオンデマンドになり、生徒と講師の直接対話によるインタラクティブなやりとりができず、生徒の進路選択は厳しい状況が続いた。コロナ禍が回復するならば、オンラインでの良さも併用しつつ、対面でのガイダンスや現地での見学や体験も実施する。</p>	<p>全学年6クラス体制が完了した。教室利用や試験実施、時間割作成などが円滑に運用できるように継続して努める。小教室よりも普通教室が足りないので、適正配置を、施設委員会と連携して検討・実現する。</p>	B A
コンピュータ	<p>1. コロナ禍における、生徒の在宅学習、教員の在宅勤務環境の整備。</p> <p>2. 教員と生徒が利用するコンピュータ、タブレットとその周辺機器の管理及び整備。</p> <p>3. ネットワーク機器の管理及び整備。</p> <p>4. プロジェクタなどの映像機器の整備及び管理。</p>	<p>1. 授業や校務のオンラン化に必要なサービスを選定、契約するとともに、その利用方法を教員・生徒に周知する。</p> <p>2. 教員用、生徒用パソコンのリプレースに伴い、機種選定し、スケジュール通りに導入、置き換え作業を行い、9月以降の授業で利用開始できるようにする。</p>	<p>1. 教職員・生徒とも、オンライン環境を利用して、授業・課外活動・校務を、校内・校外を問わずに取り組めた。特に文化祭は、昨年度に引き続きオンライン上での活動を成功させた。</p> <p>2. 半導体不足の影響で物品を調達できず、年度当初の計画を大きく達成できなかった。（この点において、自己評価を大きく減点した。）</p> <p>3. 例年通り、ネットワークを安定して運用できた。在宅勤務や在宅学習の基盤として、ネットワークを活用できた。</p> <p>4. 上記2と同じ。</p>	<p>1. コロナ禍においては、校内の情報環境の向上を進めつつも、いつ休校に切り替わっても困らないよう、在宅勤務・在宅学習の環境も整備・向上させる必要がある。しかし、予算・人員のリソースは限られているため、両者の整備を完璧にこなすことはできない。常に優先順位を考えつつ、整備を進める。</p> <p>2. 2020年度(コロナ禍)、2021年度(半導体不足)により、2年連続で当初計画を達成できなかった。これ以上、リプレース計画が遅延すると、本校の教育・研究に大きな支障が出るため、物品の調達ルートの見直し等を進める。</p>	<p>1. 中等部生・高等部生・教職員全員が、1人1台のパソコンを所有するようになった場合における、校内情報環境の検討。</p> <p>2. 学校が生徒・教職員に提供するハードウェア、ソフトウェア、クラウドサービスの種類が、ここ数年膨らむ一方であるため、整理する。これにより得られる予算・人員面の余裕を、新しいサービスの提供に振り向ける。</p>	A C
生徒会	<p>生徒の自治組織としての意識を持たせ、それに見合う活動を行う。身の丈にあった活動になるように指導する。</p>	<p>今年度から本格的に稼働したオンライン意見箱を通じて、一般生徒と生徒会本部役員の距離を縮める。</p>	<p>1. 例年とは異なり、昨年の形式を踏襲した以下の企画で、それぞれ2回目の実施をした</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新入生歓迎会に代わる「新入生歓迎動画」の作成</li> <li>・オンライン文化祭で「生徒会ラジオ」の作成。今年度は受験生から事前に募集した質問に加え、在校生からも一言PRを募集し、番組に盛り込んだ。オンライン開催で訪問者とのコミュニケーションがとれた稀有な企画であった。</li> <li>・「七夕祭」の企画実行(昨年未実施のため2年ぶり)</li> <li>・「正月祭」の企画実行。昨年より少し拡大することを計画していたが、分散登校となってしまったため、おみくじのみ1日実施。</li> <li>・HR視聴のオンライン形式での「卒業生を送る会」の企画実施。</li> </ul> <p>2. 概ね2月ごとにテーマを決めてオンライン意見箱を配信。生徒自身の問題点、学校の改善点、生徒会への要望などが浮かび上がった。バス列問題はHR放送でのフィードバック、設備については早急に改善可能なものについては学校側に働きかけた。</p>	<p>1. 2019年度以前と2020・2021年度の活動が異なるため、通常に戻すときの引継ぎが徐々に困難になっている。</p> <p>2. オンライン意見箱のフィードバックを効果的に行う必要がある。</p>	<p>引き続き、本部役員と生徒とのコミュニケーションを活発にし、生徒全体の自治意識を高めていくことが課題。</p>	A A
図書	<p>生徒たちにとってより利用しやすい図書室を司書の方々と協力して運営する。</p>	<p>図書委員の生徒を中心に、図書室での作業・お勧め図書の紹介などを行ない、開かれた図書室作りをしていく。</p>	<p>たくさんの本を読んでもらうことはもちろん、様々なジャンルの本にもチャレンジしてもらいたいという思いから、今年度も生徒の図書委員会でスタンプカードを制作してもらい、全校生徒に配布した。</p>	<p>より多くの生徒に利用してもらえる図書室作りを目指していく。</p>	<p>増え続ける蔵書の問題を解決し、書籍だけでなく、映像資料のさらなる充実をはかっていきたい。学年間の利用頻度の差をなくしていく方法を考えていきたい。</p>	B A

論文実習	<p>学術論文作成に必要な以下の点を理解すること。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 先行研究が集められ、そこに述べられている見解や主張が整理されていること。</li> <li>2. 整理した先行研究を「批判的に」見ること。</li> <li>3. 他者の意見を尊重し、自他を明確に区別する方法を学ぶこと。</li> <li>4. 論文としての形式や体裁を知る。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 今年度から4単位となり、論文実習1・論文実習2各2時間ずつとなった。 <ol style="list-style-type: none"> <li>①論文実習1(I類HRクラス単位でスタッフによる授業を行う) <ul style="list-style-type: none"> <li>・4月中は教科書『論文事始』をもとに講義を行い、論文を作成するための姿勢を学ぶ。</li> <li>・1学期・2学期で各1回するプレゼンテーションを通じて、「問」と「仮説」、それを結びつける「アプローチ」の論理性、一貫性を確認する。</li> </ul> </li> <li>②論文実習2(担当者別のクラス。授業は2クラス合同で行う) <ul style="list-style-type: none"> <li>・資料収集、プレゼンテーションのレジュメ確認、執筆にあたってのアドバイスなどの御別指導を行う。</li> <li>・下書きの査読を通じて、剽窃や形式のチェックを行う。</li> <li>・提出後に作成したパワーポイントを用いてプレゼンテーションを行う。</li> </ul> </li> </ol> </li> <li>2. 担当者決定を4月半ばとした。そのため研究案再提出までの間隔を2日程度に短縮した。</li> <li>3. 評価の観点や割合を生徒に示した。</li> </ol>	<p>論文実習1 例年通りに行うことができた。</p> <p>論文実習2 従来は論文作成作業・担当者による面談や指導を、すべて放課後や休み時間に行っていた。それを授業時間内に入れることによって、作業時間が確保され、より綿密な指導ができるようになった。テーマに共通点のある生徒が集まっているので、お互いへのアドバイスなどもできた。</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 4単位移行に伴いさまざまな改革を試行したが、実施したことさらに問題点がみつかった。2022年度スタッフとともに改善をはかり、よりよい「論文実習」を構築していきたい。</li> <li>2. テキストを改訂し、次年度からはそれを使う。</li> <li>3. 今年度もコロナ禍により、早稲田本庄との交流ができなかった。コロナが終息したら再開させたい。</li> </ol>	<p>長期的には、手法としてフィールドワーク・アンケートなどを取り入れるか否か、Ⅱ類も含めた全員に研究を課すか否か、などについても議論が必要である。</p>	B	B
国際交流	<p>Covid19の感染拡大に伴い全面中止になっている短期留学プログラムのスムーズな再開。</p>	<p>国際交流委員だけでなく、交流先の学校と懇意にしている教員の力を借りて、再開に向けて話し合いを進める。</p>	<p>日本国内の感染状況と、訪問先の感染状況の両方が同時に安心できる状況になる必要があるため、再開に向けての道のりは険しい。</p>	<p>引き続き交流先と綿密に連絡を取りながら、実施の時期にこだわらず、できるプログラムから再開していきたい。</p>	<p>Covid19の感染が落ち着いた段階でニュージーランドの新しい学校との交流プログラムを開拓していく。</p>	C	C
施設	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 安全を第一として、基本的な施設・設備の充実を常に念頭に置き、計画、整備を実行していく。</li> <li>2. 引き続き、施設・設備全体の経年による改修事案について、迅速に対応していく。</li> <li>3. 新型コロナ感染対策として施設、設備を整備する。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 第3体育館の雨漏り経過観察</li> <li>2. 既存棟に位置する4年生のロッカーの改修工事の実施。</li> <li>3. 第1グラウンドの掲揚塔側ベンチの改修工事の実施。</li> <li>4. その他、引き続き、校内全施設における改修箇所集約と改修計画および工事の実施。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 第3体育館の雨漏り経過観察 →特に問題なく経過している。</li> <li>2. 既存棟に位置する4年生のロッカーの改修工事の実施 →計画変更により改修工事は延期</li> <li>3. 第1グラウンドの掲揚塔側ベンチの改修工事の実施。 →無事に工事が実施された。</li> <li>4. その他、引き続き、校内全施設における改修箇所集約と改修計画および工事の実施。 →校内各所の再塗装や、共用棟周辺のタイル改修工事が実施された。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 第3体育館の雨漏りについては、引き続き経過観察し、問題がある場合は、関係部署と連携し、迅速に対応していく。</li> <li>2. その他、引き続き、校内全施設における改修箇所集約と改修計画および工事の実施。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 既存の施設も30年を目前に老朽化が進行している。中高、SFC、三田管財部など関係部署とも連携をとりながら、優先順位をつけて計画性をもって対応していきたい。</li> <li>2. 6学年すべてで6クラス揃ったが、もともと教室数が潤沢ではないうえ、カリキュラムが多様化されていく中で、新棟建設、増設等も計画していきたい。</li> </ol>	A	A
BLS	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 救助の実践を通して、緊急事態の判断、危機管理、生命の尊厳、市民の義務を根付かせる。</li> <li>2. 3年以内の再履修で実行能力の低下を防ぐ。</li> <li>3. ボランティア精神の育成。</li> <li>4. 教職員の受講率の向上。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 指導員の指示に従い技術習得に励む。</li> <li>2. 講習後、慶應BLS教育の取り組みについて説明にあわせ、校舎内に設置してあるAEDの場所を確認する。</li> <li>3. 実際にBLSを行った生徒を表彰する。</li> </ol>	<p>2年生はビデオ講義のみを行い、体育の授業でダミーを使用した実技を行った。1、4年生は藤沢市消防局の協力もあり、例年通りの実技を実施することができた。本校6年生の実体験インタビューを視聴し、より身近にBLSの大切さを学ぶことができた。</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 感染症対策を十分に考慮し、一人でも多くの生徒が実技を受けられるようにしたい。</li> <li>2. 教職員の受講数を増やすため、学校行事作成の際、教員が受講可能な日程に可能な限り設定をしたい。</li> <li>3. エピペンの講習が実施できておらず、次年度には出来るようにしたい。</li> </ol>	<p>この活動は、続けていくことに意義があり、塾生塾員誰もが、手をさしのべられる環境を目指す。</p>	D	B

<p>年会誌</p>	<p>年会誌発行の期日の円滑化、及び正確さを目標とする。</p>	<p>各担当部署に原稿の速やかな提出をお願いする。行事ごとに原稿の依頼をした。校正は年会誌担任のみならず、各クラス担任・クラブ顧問にも依頼した。</p>	<p>コロナ禍で学校行事が中止となったため、写真を含め原稿を集めることが非常に困難であった。例年にない切り口での作文を依頼し、回収したが、分散登校等の影響で締め切りを大幅に遅らせることになった。</p>	<p>提出期限の提示方法の工夫。学校に生徒や教員が集まる機会が少なかったため、締め切りを伝えても徹底できなかった。行事が次々と中止になる中、代わりに載せる原稿を依頼したが、理解を得てスムーズに変更できた。</p>	<p>社会情勢の変化に対応しつつ、学校生活をより正確に記録に残せるよう、原稿の回収を工夫していく。行事が突然変更になることがあるため、その際の別テーマを考えておく。</p>	<p>C</p>	<p>C</p>
<p>クラブ運営</p>	<p>生徒が安全かつ有意義にクラブ活動ができるよう、環境および制度を整備する。</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>各活動場所における危険箇所を調査し、安全に活動できる活動環境を整備する。</li> <li>新型コロナウイルス感染症によるクラスター発生防止対策の徹底。</li> <li>熱中症予防などの安全対策。</li> <li>安全でスムーズなクラブ紹介の実施。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>前年度に続き、厳しい制限付きでのクラブ活動実施となった。新入生の入部については、年度当初に手続きできた。</li> <li>新型コロナウイルス感染症によるクラスター発生防止対策の徹底。 → 感染予防に必要な、消毒用品や衝立の準備、クラブ毎に施設利用の条件をその都度、部長、校医と確認し、感染予防環境の徹底を促進した。</li> <li>熱中症予防などの安全対策。 → 新型コロナ感染症予防との兼ね合いを含め、各クラブへ周知した。毎年実施してきた主将主務・監督コーチを対象の熱中症対策講習会については、前年度同様、密の回避や、活動制限によって、発生の可能性が低かった事などを考慮し実施しなかった。</li> <li>安全でスムーズなクラブ紹介の実施。 → 従来どおりの対面でのクラブ紹介を実施することが難しかったため、前年度同様、Google Classroomでクラブ紹介クラスを作成し、各々がPR活動を行った。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>来年度以降も、社会情勢に合わせた感染予防対策を講じる必要がある。今年度は頭在化しなかったが、施設不足解消に向けた努力は引き続き行う必要がある。</li> <li>生徒、教員の負担軽減を目的としたペーパーレス化を推進してきたが、さらにその適応範囲を広げる検討を継続する。</li> <li>今年度実施出来なかった熱中症講演会について、必要性を考慮しながら実施したい。</li> <li>様々な情報の伝達方法について、対面と、オンラインでの実施が、効果的かつ効率的であると考えられるため、今後もこのハイブリッド方式で実施していきたい。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>安全性を高める対策については、検討と改善を継続する。</li> <li>生徒の活動に影響がないように教員負担を軽減する。義塾の「臨時職員制度」を有効活用し普及を促進したい。</li> <li>電子署名を利用することで、紙の書類を大幅に減らす事を検討すべきである。</li> <li>活動場所の安全問題について、最も深刻な問題は、グラウンドの過密利用についてである。引き続き、外部施設の確保について強く要望をしていく。</li> </ol>	<p>B</p>	<p>B</p>
<p>広報</p>	<p>本校の広報に関わる業務全般の改良を目指して実施計画・企画・実施・評価・報告をする。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>外部団体主催の説明会への参加</li> <li>コロナ禍に対応した学校主催の説明会の質の向上とスムーズな運営を目指した計画</li> <li>改訂版学校案内パンフレットの活用</li> <li>再構成版 Web サイトの運用開始と改良</li> <li>学校紹介ビデオリニューアル版の作成</li> </ol>	<p>広報に係わる業務全般の改良を行い、運営する。それと並行して、初等部からの受け入れ完成年度以降の生徒募集に向けた資料の改訂を行う。</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>2020年度に引き続き、コロナ禍により例年参加している外部団体（神奈川県私立中学高等学校協会、海外帰国子女教育専門機関 JOBA）主催の説明会中止に伴い、代替オンライン企画に参加した。</li> <li>感染拡大防止を念頭に安全を第一優先事項としながらも、通常の校内見学を一切お断りしている状況の中、受験生が実際に本校を訪問する機会を確保するため、オンライン開催とオンライン併用の対面開催（校舎見学会）を組み合わせ学校主催の説明会を実施した。インターネットによる動画配信は、海外各地での視聴を考慮して一定期間視聴可能なオンデマンド配信とした。また、高等部においては希望者を対象にオンライン個別相談会も後日実施した。 ※対面開催は mirai compass による事前申し込み制 中等部 全3回 7/10(土),9/11(土),11/13(土) 高等部 全4回 7/10(土),7/24(土),8/28(土),11/13(土)</li> <li>学校案内パンフレットを Web サイトへの導入版と位置づけ、簡易版作成を中止、パンフレット形式（全24ページ）からリーフレット形式（全8ページ）に変更し、対面開催の各説明会にて配布、活用した。</li> <li>旧 Web サイトに見いだされた問題点（操作性や見やすさなど）を改善するため、新規に素材となる写真や動画の撮影を行い、再構成版の新たな運用を開始した。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>新型コロナウイルス感染状況の収束がなかなか見られない現状を鑑み、また今年度の実施経験に基づきその利点を活かして、次年度以降も学校主催の学校説明会はオンライン（オンデマンド）開催とオンライン併用の対面開催（予約制）を組み合わせ実施する方向で考える。ただし、実施時期や実施回数、特に mirai compass による申し込み時の条件設定については、事務局サイドと連携して検討・改善する必要がある。</li> <li>現行の Web サイトの保護者ページにおいては一律のパスワードで管理しているが、2022年度以降は各家庭で管理し、個人設定したパスワードを用いて閲覧するように変更となる。また、クラブのページの更新方法についても整理する。</li> </ol>	<p>昨年度から業者を変更し、リーフレット・Web サイト・学校紹介動画の順に一連の資源作成を進めてきた。コロナ禍が長引き終息が見られないため、マスク着用での撮影となり、一方で各種行事が実施されず、その様子が素材として撮影できなかった。現在の状況下では最善を尽くせたと思うが、社会状況の変化を見ながら、本来の学校生活の様子を素材とした資源作りを近い将来行う必要がある。その際には入試形態の変更に配慮しながらも、横浜初等部受け入れ後教育目標・教育内容を発信し、学校の良さがわかるように学校内外への広報体制を充実させたい。</p>	<p>B</p>	<p>A</p>

			5. コロナ禍（マスク着用状態）での学校生活の様子や在校生 10 名に対するインタビュー動画を撮影した。さらに卒業生 4 名に動画作成を依頼し、それらを現行の素材に盛り込んだ学校紹介ビデオリニューアル版を 2022 年度活用を目指し、現在作成中である。				
芸術鑑賞	<p>人生をより豊かなものにするために、質の高い芸術に接する。3 年間のローテーション（クラシック音楽→日本の古典芸能→ミュージカル・オペラなど）で、多様なジャンルに接する機会を設けている。2020 年度の芸術鑑賞会が中止となったため、今年度はミュージカル・オペラを観劇した。</p>	<p>【高等部】オペラ 演目：高校生のためのオペラ鑑賞教室 2021 『カルメン』 公演日：2021 年 7 月 10 日(土)13:00 場所：新国立劇場</p> <p>【中等部】ミュージカル 演目：劇団四季のアンドリュウ・ロイド＝ウェバー コンサート～アンマスクド～ 公演日：2022 年 2 月 9 日(水)13:30 場所：神奈川県民ホール</p>	<p>コロナ禍であったが、公演は開催され、中・高ともに感染対策を徹底し、無事参加することができた。</p> <p>「高校生のためのオペラ鑑賞教室」は以前も利用しており、その際中等部生も特別に参加をさせてもらっていたが、今年度は「カルメン」と人気のプログラムで、中等部生の座席の確保ができず、高等部生のみでの参加となった。</p> <p>中等部生は 2 月(入試期間中)に実施した。劇団四季のミュージカルも実績があるが、今回は新しいプログラムを観劇し、概ね好評であった。</p>	<p>次年度はクラシック音楽(オーケストラ)を予定している。中高同日同時プログラムでの開催を目指す。中高すべてのクラスが 6 クラスとなるため、1400 人程度が一度に鑑賞できるプログラムの検討が必要である。また、2 月(入試期間中)は 6 年生の参加ができないため、開催時期は 7 月(または 12 月)が望ましい。</p>	<p>チケットの販売方法や公演内容(歌舞伎やミュージカル)によっては費用が高価な場合がある。</p> <p>3 年間で 15,000 円(年平均 5,000 円)の予算で行うように調整する。</p> <p>芸術鑑賞会を行う時期は、その他の行事とのバランスを考えて 7 月(1 学期期末試験後)が望ましいが、7 月公演のチケットの団体優先購入をする場合は、前年度の 2 月か 3 月に人数を確定する場合がある。しかし、在籍生徒数が確定するのは 4 月になってからであり、生徒に鑑賞してほしいプログラムであっても申込時期の関係で選択できないものがある。授業との関係で、全校生徒が同じ日に鑑賞できるプログラムが望ましいが、来年度も中等部の生徒数が増えるので、検討が必要である。</p> <p>新型コロナウイルスの感染状況によっては、演奏会など公演が中止になること、実施されても入場者数に制限がある場合がある。実施の場合も、感染防止対策に努める必要がある。</p> <p>大人数での鑑賞が困難な場合、それに代わる文化的な活動の検討を要する。</p>	D	A
自己点検	<p>教科、委員会が、教育活動の内容について評価する仕組みを設け、本校の教育水準が向上し続ける為の補助的手段を提供する。また、活動内容の重複や効率性の検証材料を提供することで、円滑な学校運営に寄与する事を目的とする。</p>	<p>各年度における教科、委員会の活動内容をまとめ総括を行う。</p> <p>各組織の目標設定、活動内容の評価と改善の記録が適切になされているかを確認する。</p> <p>保護者の学校に対する満足度を測るために、有効なアンケート項目を設定する。自己点検で得られた情報を基に、他教科、他委員会相互の情報交換を促す。公表可能な学校評価資料を作成する。</p>	<p>現行の評価方式による作成方法が定着し、スムーズな書類作成で予定が達成された。2018 年度より自己評価の客観性と透明性を高めることを目的とし、学校関係者評価を実施した。手順としては、保護者世話人の 35 名に本校ホームページの学校評価一覧をご覧頂き、各教科、委員会の評価が適切に行われているかの設問に 4 段階評価で回答して頂いた。</p>	<p>評価書類作成の内容や作成の仕組みについて、教員の、特に年度末の他業務への影響を考えると現行の方法が最良であると考え。今後も各組織が自己点検・自己評価を材料に議論を促す仕組みを検討していく。</p> <p>年度間の担当者変更の際にも活用していく。</p> <p>保護者から目標設定と結果の数値化を求める意見もあったが、教育活動は必ずしもデータとして目標設定、結果をすることが適切とは言えず、今後も各教科、委員会で記述式の評価と分析を継続していきたい。</p>	<p>文科省「学校評価ガイドライン」平成 28 年改訂で、小中一貫校における教育目標の設定などについて示されている。横浜初等部との連携の中で、学校評価に関して文科省の指針である義務教育 9 年間の目標設定に加えて、本校においてはさらに高等部 3 年間、計 12 年間の中での段階的な目標設定について議論していく。</p> <p>学校評価が形骸化しないような取り組みは常に必要である。</p>	B	B

1年生旅行	<p>・富士吉田ホールアース自然学校でのクラストレッキングや洞窟探検、稲刈りや教材を使った物作りのプログラムなどを通して、富士吉田の自然や歴史、文化を学ぶ。</p> <p>また、これらのプログラムによって集団生活のルールを学び、規律ある行動を身につけるとともに、友達と協力して一つのことを成し遂げる力をつける。</p>	<p>事前学習として理科の授業で富士山について学ぶ。</p> <p>1.ホールアース自然学校の方々に来校して頂き、以下の内容を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・富士吉田の自然や歴史、文化についての講演会</li> <li>・物作りプログラム(ロープワーク、糸紡ぎ、ヘンプアクセサリー、バードコール、鹿革クラフト、森のかけら)</li> </ul> <p>事後学習には物作りプログラムの作品について各自ポスターの作成をした。</p> <p>2.江の島散策を実施した。</p>	<p>1.コロナ禍、旅行の実施はできなかった。代替案として富士吉田ホールアース自然学校の方々に来校して頂き、講演会や物作りプログラムを行った。新しい物作りプログラムとしてはバードコールや鹿皮クラフトもでき、好評だった。初めてクラスを越えての交流もでき、生徒は楽しんで取り組めた。</p> <p>2.自然に触れ合いながら、グループ毎に課題解決を行う江の島散策を実施した。仲間と協力し、江の島の歴史を感じる事ができた。</p>	<p>来年度も旅行が実施できない場合は、本年同様に自然学校の方々を招き、講演会や物作りプログラムを実施したい。今後は学年全体での団体行動が課題である。</p>	<p>6クラス同時に旅行を実施することが最善であると考えている。よって、宿舎の変更、もしくは、目的地の変更を検討することが引き続き必要である。</p> <p>また、現在の行程で続行していく場合、雨天時の代替プログラムの充実が今後の課題である。</p>	B	B
2年生旅行	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最先端の科学に触れ、知識を豊かにする。</li> <li>・集団で行動することの意義を理解する。</li> </ul>	<p>つくばサイエンスツアーとして以下の3つの施設を訪問した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・筑波実験植物園</li> <li>・エキスポセンター</li> <li>・地図と測量の科学館</li> </ul>	<p>3クラスずつの2班編制とし、貸し切りバスを各クラス2台ずつ手配をして、日帰りで行った。</p> <p>事前学習として、理科・社会からの課題を配信した。</p>	<p>以前のように宿泊を伴う学習にするのか、今年を踏襲して日帰りにするのかを、感染状況を見極めながら適切な時期に判断をする必要がある。</p>	<p>コロナ禍で2年間東北旅行を実施していないため、訪問先の状況もかなり変わっていると思われる。</p> <p>再開する際は、震災学習などをどのように実施していくかを再構築する必要がある。</p> <p>また、宿泊施設や食事会場の感染予防の対策がどの程度しっかり行われているかを、しっかりと下見をした上で、宿泊を伴うプログラムが安全に実施できるかを判断をする。</p>	C	B
3年生旅行	<ul style="list-style-type: none"> <li>・広島に関連した平和学習として、1,2学期に、多面的な角度から長期間に渡り、学習を行った。</li> <li>・12月の校外学習では、総合学習として、身近な自然がどのように形成されているのかを、かわさき宙と緑の科学館と榊形山を訪問し、地学巡検を実施した。</li> </ul>	<p>平和学習として以下のことを行なった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Google Classroom を用いて、(1)リンク先のHPを読んで、1 広島歴史・戦時下の広島、2 原子爆弾による被害、3 世界の核兵器の現状、4 核兵器のない平和な世界への中から自分の関心のあるものを選び、概略を把握する。(2)「もっと調べてみよう」の研究課題を一つ選択し、それについて調査し、学習を深める。(3)調べたことをGoogleフォームにまとめる。</li> <li>・「1945年8月6日」を読み、広島平和学習のレポートを作成する。</li> </ul> <p>総合学習 Week</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Google Classroom 上に「総合学習_資料館」を用意し、興味や関心がある分野に別れて、個別の学習を行った。</li> <li>・本プログラムは新型コロナウイルス感染症対策の観点から、学校に登校できなくても、オンラインで実施できるように配慮・工夫を施した。</li> </ul> <p>総合学習_課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Forms から希望を回答する。</li> <li>・総合学習 Week (10/5・6・7の3日間)の課題は、添付のワークシート (Google ドキュメント (A4 サイズ2枚)) で、Classroom 上で提出させた。課題に取り組むにあたり、必要な資料は「総合学習_資料</li> </ul>	<p>新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、旅行は実施できなかった。代替案として以下のことを行なった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・広島平和学習として、資料を元に、平和に関する学びを深めた。平和に関するレポート作成も行った。</li> <li>・道徳の時間に平和学習についての学びを深めた。現地に行くことはできなかったが、レポート作成を通じて学びを深めた。</li> <li>・12月に校外学習として地質に関する野外実習も行った。</li> </ul>	<p>旅行を再開できることを前提に、準備を進める。また、旅行が実施できない可能性もあるので、その代替案についても模索する。</p>	<p>Aプラン、Bプランのように枠組みを準備し、旅行の主旨に重きを置きつつ、どちらかは実施できるような平行案を用意し、実施できるように尽力する。</p> <p>次年度は2班編成で実施する初めての3年旅行になることと、旅行社も初めてとなる。しっかり綿密な準備を旅行会社と進めていく。</p>	B	B

		館」においてある資料を印刷するよう指示した。3日間の活動で学んだことを、まとめさせた。						
4年生旅行	<ul style="list-style-type: none"> <li>日光を地理学・生物学・文学の視点で観察し、地域の歴史や風土について学ぶ。</li> <li>事前学習と現地での学習を総合した、自発的な探求活動を行う。</li> <li>集団での活動を通じて、協力し合う態度や規律ある行動を身につける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>事前学習として、4～5名程度の男女混合の班を作り、与えられたテーマの中から一つを選択して共同でレポートを作成する。さらに、各クラスで発表を行い、完成したレポートを掲示する。また、発表を聞く中で、各生徒がリサーチクエスチョンを設定する。</li> <li>日光校外学習として、日光東照宮の見学、戦場ヶ原ハイキングを行う。</li> <li>事後学習として、事前学習と現地での見学を総合したレポートを提出する。内容は、各自が設定したりサーチクエスチョンに沿ったものとする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>事前学習は、校内にて2日間、グループ学習を行った。テーマをよく理解し、各班とも充実したレポート制作・発表になった。</li> <li>日光校外学習は3クラス2班編制にて実施した。限られた時間の中で幅広い学習になるよう行程を設定した。東照宮見学により文化的側面を、戦場ヶ原にて自然の豊かさや動植物の多様性に触れる機会になるように考えた。しかし、目的を達成できるような十分な見学時間が確保できたとは言いがたい。より充実した学びが得られるよう、余裕を持った時間設定にする必要がある。</li> <li>感染症対策として、団体列車の利用、1クラス2台のバス利用とした。</li> </ul>	北陸3泊4日の旅行を中心とした総合学習を立案しながら、新型コロナウイルス感染症などにも柔軟に対応できるようにする必要がある。宿泊日数を減らした旅行の検討や、本年度の反省を踏まえ距離や時間を考慮し目的を達成が見込まれる校外学習地の設定、オンライン・学内活動のみで実施できる代替案を準備する。	北陸旅行の見学地や目的の再検討、また感染症対策を考慮した行程の作成を進める。また宿泊を伴わない総合学習の目標や見学地の再検討も同時に進める。	B	B	
5年生旅行	<p>京都奈良研修旅行の代替として、2点を実施した。</p> <p>1点目として、全員を対象に箱根研修旅行(日帰り)を実施した。</p> <p>2点目として、4つの講座(ワークショップ)から各自が選択したものを通じて、自身の興味やキャリアデザインに向けての考えを深める機会とした。</p>	<p>箱根研修旅行は2クラスずつ3日間(10/6・7・8)に分かれて、彫刻の森美術館、富士屋ホテル(昼食)、県立生命の星・地球博物館の見学をおこなった。ほとんどの生徒が参加した。</p> <p>選択講座(ワークショップ)は以下を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>*「こころざし探究プログラム」(松下政経塾・オンライン 10/4・66名)</li> <li>*「主権者教育プログラム」(松下政経塾・オンライン 10/4・38名)</li> <li>*「日経から学ぶ・探究プログラム」(日本経済新聞社・10/4・35名)</li> <li>*「プログラミング体験」(ソーバル(株)・10/5 午前/午後および 10/6 で3回実施・計99名)</li> </ul>	<p>いずれのプログラムも内容的には大きな問題もなく終了できた。</p> <p>箱根研修は交通機関の乱れで集合時刻に遅れた者もいたが、バスを2クラス4台体制としていたため、対応できた。</p> <p>選択講座は各自興味を持って前向きにとり組むことが出来た。オンライン講座と登校して対面で実施したモノとがあったが、特段の問題は生じなかった。</p> <p>課題として、箱根研修あるいは選択講座のいずれかからレポートを作成するという形式としたが、深い掘り下げのできているものが見られた。</p>	<p>旅行を再開できることを前提に準備を進めることになろうが、宿泊をともなう研修旅行が実施できない可能性もあるので、代替案についても模索する。</p> <p>選択講座(ワークショップ)については、JTBが用意したものをベースに実施したが、費用徴収の点からもこの形式は悪くない。プログラミングに関しては、情報科の教員(渡部)が学年主任だったため、複数回の打合せや当日の対応などを一手に引き受けることができたが、他の教員では難しい面もあることがわかった。今回の経験やサポート体制次第で継続できる可能性もあるかもしれないが、担当教員の負担は大きい。</p>	京都・奈良旅行を従前通りに実施した場合、滞在中の活動が連日班別自主行動となるため、生徒各個人の興味や事前・事後学習と結びつきにくいのが現状である。また、感染症予防の観点からも、望ましい形式とは思えない。実施するかどうかを含めての抜本的な再検討を要する。	C	B	
6年生旅行	<p>北海道旅行の代替(※)として、以下3点を目標として卒業生によるオンライン講演会を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 大学進学を目前としている6年生に向けて、社会人(本校卒業生)から講演会をしていただくことで、「大学生活をどう送るのか」「社会に出て仕事をするとはどういうことなのか」といったことへの意識を高める。</li> <li>2. 様々な現場で10年以上活躍している立場から大学生活を振り返ったときに、6年生がこれから送る大学生活に向けてのアドバイスをいただく。</li> <li>3. 大学生活の先にある自己実現・社会貢献のあり方を知り、進路選択に留まらない自分の人生のビジョンについて長期的に考える。</li> </ol>	<p>以下9名のオンライン講演会を各クラス4～5名ずつ聴講した。(事前に希望をとり、講演者の人数が等しくなるよう担任で振り分けた)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①醍醐 辰彦 君(8期・経済学部) 『スポーツを仕事にするー海外留学とキャリアー』</li> <li>②川崎 健太 君(11期・医学部) 『医療現場からみる人生で大切な3つのこと』</li> <li>③藤城 奈奈 君(11期・法学部法律学科) 『私のキャリア選択ー学部選択から現在に至るまで』</li> <li>④小川 恵美悠 君(12期・理工学部物理情報工学科) 『光技術で新たな医療機器を創る挑戦!』</li> <li>⑤屋代 顕 君(12期・総合政策学部) 『大学生という「自由」の意味。それは、仕事・家庭・人生にどう影響するのか。』</li> </ol>	<p>社会の第一線で活躍する方々の講演から、より豊かに、そして社会に貢献して生きていくための手がかりを得ようと努め、そこから得た生き方のヒントを自分の持っている知識・経験と結び付けて考察した。</p> <p>またそれをグループメンバーと協力してプレゼンテーションにまとめ、講演内容について、字面だけではなく講演者の気持ちも含めてクラスで共有できる、非常に完成度の高い発表を行うことができた。</p>	<p>旅行が再開できれば、これまでの旅程と修学内容を基本として、感染対策を鑑みた具体案を立案する。</p> <p>昨年度に引き続き、今年度も旅行を実施できなかったため、2019年度に提出されていた以下の課題・対策案をスライドして、次年度の旅行に活かしたい。</p> <p>総合学習としての旅行にどのような課題を設定し、評価していくか継続して検討する必要がある。最終学年として深い学びを期待したいが、限られた日数での都市中心の訪問では、事前学習→訪問→事後学習で「北海道」らしさを学ぶには限界を感じる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 台風の影響を受けやすい時期であるため、現状ではサイクリングの日程の所のみ雨天プランを用意しているが、他の日程でもある程度は考慮する必要がある。</li> <li>2. 昭和新山は行程上の立ち寄り場所としても都合の良いところで有り、次年度も継続したいが、上記の通り雨天時のプランを検討したい。しかし、2020年4月に「ウポポイアイヌ文化博物館&amp;公園」が改修終</li> </ol>	最終学年の総合的学習の集大成としては旅行先の再検討が必要である。北海道の主要都市の観光が中心の現状では、北海道の自然や文化を学ぶ機会が少ないばかりか、社会系の学習課題も実は他学年と比較しても設定が難しい。行先を北海道で継続する場合でも、行程の大幅な変更を考慮してはどうか。バス移動が長く、時間に大幅なロスがあることは懸念材料であるが、以前の道東方面など自然科学系の学習に主眼においたコースの復活も検討したい。	将来、第二外国語カリキュラム編成に伴い、語学習得を目的とする旅行が実施されれば、1学年全員で1カ所を訪問するという形式そのものも検討していくことになる。	A	B

	<p>※10月時期に京都研修旅行を計画したが、3月に延期判断。しかし、3月も旅行は実施できず、箱根への日帰り旅行(遠足)を実施した。</p>	<p>⑥岡本 崇志 君 (13期・理工学部数理科学科) 『SFC での学びをどう活かすか～アクチュアリーと数学を通じて～』</p> <p>⑦藤本 浩介 君 (13期・商学部) 『オリンピック・パラリンピックを通じて学んだこと』</p> <p>⑧亀岬 直毅 君 (14期・理工学部物理情報工学科) 『「やりたいこと」をみつけるヒント』</p> <p>⑨吉田 麻里絵 君 (14期・法学部政治学科) 『10代の自分に伝えたい、自分らしく生きるためのコツ』</p> <p>聴講後、各班で講演内容・講演を通じて感じたことおよび考えたことをまとめ、クラス内にてプレゼンテーションを行った。 また、講演者には感想をまとめたものをお渡しした。</p>		<p>えて利用可能になる(HPを見ても充実した内容が期待できる)ので、おそらくこちらを優先的に、行程を組むことになる。JTBとも話し合ったが、長距離移動の日にあたるので、アイヌ文化施設と昭和新山・有珠山の両方の訪問は難しいとのことである。</p> <p>3. 例年札幌自主研修では、札幌のみのコースと札幌+小樽コースの2つから選択させているが、ここ数年は札幌コース選択がゼロまたは1班である。教員配置の点からも、次年度からは札幌+小樽コースのみを提案する。</p> <p>4. サイクリングでは自転車の交通マナーをより徹底させる必要がある。</p> <p>5. 体験学習は、解説も含めて効果が高いため次年度も実施をしたい。</p> <p>今年度実施した卒業生による講演会については、生徒たちからも前向きな感想を聞くことができ、一部の生徒たちは個別に連絡をとってさらに話を深堀するなど積極的な態度を確認することができた。</p> <p>時期・人材確保の課題が解消できれば、今後も実施していく価値の十分ある総合学習であると考えている。特別カリキュラム時期の利用や対面での実施についても検討していきたい。</p>		
--	--	--	--	---	--	--